法式研修会資料

平成２２年１１月２７日午後１時から

本山誠照寺

主催　法式特別委員会

◎ 本山内陣出勤作法

一、念珠は親玉を上に握り、中啓を右手に持ち両手は腰に置き、後門廊下に、出勤順に二列に整列。ご法主が来られるまで私語は慎み静かに待つ。

二、出勤三帀または楽で、二人ずつ互いに一礼して、同時に入堂し、脇 壇の中央より少し手前で一礼。右（左）に向き左足より静かに通路のまん中を通る。須弥壇の中央のところで一礼。さらに進み定席の手前から入り、向い側僧侶と互いに合わせて着席。

三、着席後、中啓は経卓台に斜め四十五度に置き、念珠を持ったまま、背筋を伸ばしてご法主のご出仕を待つ。ご出仕着座 まで(その際、頭はさげない)両手を軽く握り腿に置き、正しい姿勢で待つ。（ご法主が合掌されるまで個々に合掌しない）

四、ご法主が着座され、ご法主に合わせ一斉に合掌礼拝。念珠は経卓左に親玉を向こう側に左手を添え右手で置く。

五、読経の際、初めに経本を頂戴する。目より上に四十五度にあげて静止して三秒で解く。経本を開いてからは頂戴しない。経本は両手でもって読む。（折り経本は２ページを広げ右手で送る。綴じ経本は二ページを広げ左指でうかし右手で送る。）お経の区切りの時は頂戴する。終わりには経本を綴じてから頂戴する。これらはご法主に合わせて行う。流通文の前の区切りではリンは打たない。

六、回向文が済んだら念珠を左手を添え右手でとる。ご法主に合わせ合掌、礼拝する。

七、法主がご退出される際、お姿が見えなくなるまで(頭は下げない)両手を軽く握り腿に置き、動かず正しい姿勢で待つ。

八、退出は、ご法主が後門に進まれた後、上席から、中啓を持ち二人ずつ同時に立ち、互いに一礼して退出する。次席は、前席が自分の前を通りすぎたら立ち、互いに一礼して退出する。順次同じように退出する。

九、退出では須弥壇の中央のところで一礼。脇壇の前で一礼。左（右）に向き、後門に進む。互いに会釈して廊下に出る。ただし須弥壇の中央より後の席は、自席で起立時の一礼となり、後は前席と同じ。

◎登礼盤(登壇)・降礼盤(降壇)作法

導師が法要中に礼盤に座すことを登礼盤(登壇)といい、礼盤から降りることを降礼盤(降壇)という。

※登礼盤(登壇)の作法は、次の順序で行う。

一、導師は左脇壇側の三畳台の第一席（最も外陣側）に着座し、合掌礼拝のあと、伽陀または讃一句が終わり次第（同音より)、起座して、正面に行く。また、第一席に着座しなくて直接後門より出仕する時は、讃一句が終わり次第（同音より)、左脇壇側より出仕して、正面に行く。(直登壇という。)

二、敷居ぎわに起立し、御本尊に向かって一礼する。

三、左足より進み礼盤前で蹲踞(そんこ)して、中啓を磬台の両脚の間に置く。

四、右手で脇卓の上にある柄香炉をとり、柄の右端を握り、左手を添えて胸の前に保持する。三拝（蹲踞(そんこ)－起居－蹲踞(そんこ)）したあと、蹲踞したまま右手で柄香炉を脇卓の元の位置に置く。

五、姿勢を正して、ひざを礼盤上へ左－右－左－右と進めて正座する。(腰掛けの場合は、磬台側より入り、正面に立つ。）右手で柄香炉をとり、向卓の右方にたてに置く。

六、右手で磬台から磬枚（打棒）をとり、柄香炉の右側にたてに並べて置く。

七、前卓の香盒の蓋をとり（蓋は香盒の右縁にかける)、焼香を二回する。香盒の蓋を閉じて、合掌礼拝する。念珠を右手で、向卓左側に親玉を向かいにして置く。

八、懐中より声明本をとり出し、両手で頂戴してから開いて向卓に置く。(声明本は、初めから向卓におく場合も　ある。このときも声明本を両手で頂戴してから開いて向卓に置く。)

讃終了後

九、右手で磬枚をとり、磬一音して磬枚を向卓にもどす。

十、右手で柄香炉をとって左手に持ちかえ、右手で磬枚をとって二音目を打つ。磬枚を置き、両手で柄香炉を保持して調声し、同音になれば置く。

※調声時には、これ(十、)を行う。

※降礼盤の作法は、次の順序で行う。

一、回向文読経が始まると、声明本を閉じ、両手で頂戴してから懐中に納める。(初めから向卓におく場合は、そのままで良い。)

二、向卓の念珠を右手でとり、左手にかける。回向文の一句終わるまでに香盒の蓋をとり（蓋は香盒の右縁にかける)、焼香を一回する。金香炉の蓋を

する。

三、同音になると、合掌礼拝し、右手で磬枚をとり、磬台にかける。右手で柄香炉をとって脇卓に移す。

四、右ひざから右ー左ー右ー左と後退し、礼盤の手前で蹲踞する。（腰掛けの場合は、起立し磬台側より後ろ向きに下がり、正面に立つ。）

五、右手で柄香炉をとり、左手を添えて胸の前に保持し、一拝（蹲踞（そんこ）ー起居ー蹲踞（そんこ））する。右手で柄香炉を脇卓の元の位置に置く。

六、右手で中啓をとり、右足より引いて敷居ぎわまで後退し、一礼する。自席に行き、着座する。（直登壇の場合は、直接左脇壇側より後門に至る。）

七、脇壇のすぐ前や須弥壇のま横を通過するときは、入堂・退出の場合と同様に立ち止まり、御本尊の方へは向き直らず、進行方向を向いたまま一礼する。

◎ 打物作法（鈴等の）

法要や儀式を行うに際して、行事の開催や開始を知らせたり、僧侶の出仕を促したり、僧侶の出仕を促したり、法要・儀式中に用いるものとして打物がある。

※梵鐘・喚鐘

梵鐘は、法要や儀式を開始するに先立って、大衆が参集する合図として三十分または一時間前に撞く。打数は十八打とし、各間隔をゆっくりあけ、余韻がかすかになってから次を撞き、十六、十七打は少し間隔を早めて撞く。十八打は元の間隔で撞き、打ち止めとする。梵鐘は、法要や儀式以外（朝夕の時報など）に撞く場合もある。

喚鐘は、法要や儀式の開始を知らせる合図として打つ。打ち方は、次のように適当な間隔で七打してから、打ち上げて打ち下し、次に五打してから再び打ち上げて打ち下し、最後に三打する（三打のうち第二打は小さく打つ）。

七　打　　打ち上げ　打ち下し
○○○○○○○ •◦○○○◎○○◦◦•

五　打　　打ち上げ　打ち下し
○○○○○　　•◦○○○◎○○◦◦•
三　打
○○○

大太鼓は、主として梵鐘を打つ三十分または一時間前に打つ。法要や儀式の開催を知らせる合図として打つ。

打ち方は（最初に太鼓の縁をかるく打ってから）次のように打つ。

一　打　　打ち上げ　　打ち下し
○　•◦○○○◎○○◦◦•

打ち上げ　　打ち下し　　二　打
•◦○○○◎○○◦◦•　　○○

梵鐘がない場合は代用として用いてもよく、その場合は梵 鐘と同じように打つ。

木版は、厚さが十㌢程度の長方形の板やできた 打物で、両端をひもで吊るし撞木（丁字形の木づち）で打つ。主とし出勤者や参列者に対して服装の準備や、出仕を促す合図などに用いる。

打ち方は、次のように打つ。

一　打　　打ち下し　　一　打
○　　◎○○○◦•　　○

※磬・鏧・砂張

法要や儀式中に用いられる打物に、磬・鏧・砂張がある。

磬は、金属製の薄い板状の打物で、礼盤右の磬台 に吊るし、導師 が登礼盤をしたときに用いる。

打つときは磬枚（打棒）の端を持ち、これを垂直に保ちながら打つ。

鏧は、やや深いお椀型の金属製の打物で、鏧布団または鏧布団の下に鏧台を用いることもある。

大鏧・小鏧・引鏧の三種があり、すべて桴（ばち）（打棒）で外側を打つ。（小鏧は内側を打っても良い）打つ箇所は、読経の最初と中間および最後に打つ。最初は二声（単に○○と二声する）し、中間（経段または短念仏の終わりなど）では一声、経段中の各節および回向の終わりでは

○　○　○　　（強弱）と三声する。
中　小　大

また、その他に緩急作相の打ち方があり、次のように打 つ。

緩急の打ち方

一声　　打ち下し　　二声
○　　○○○○◦•　　○○

作相の打ち方

出勤　一声　　打ち上げ　　打ち下し　　二声
○　•◦○○○◎○○○◦•　○○

退出　　打ち上げ　　打ち下し　　二声
•◦○○○◎○○○◦•　○○

砂張は、鏧よりやや肉厚が薄いお椀形の金属製の 打物で、砂張台または鏧布団の上に置いて用いる。打ち方は扁平な桴で内側を打ち、その他は鏧と同じ要領で用いる。ただし、緩急・作相の打ち方はしない。

■■■■■真宗誠照寺派葬儀式次第 ■■■■■

★**葬儀について** 真宗誠照寺派の正しい葬儀を行う為に
世間一般の俗信や迷信に惑わされることなく、浄土真宗にふさわしい葬儀を行うようにしたいものである。

門徒の方から往生の連絡があったら次のような流れで進む。

枕経→法名（お寺まで取りに来てもらう）→（お悔やみ）→（納棺）→通夜勤行→おかみそり→出棺勤行→　葬場勤行→火屋勤行→（還骨勤行）→納骨・寺参り→初七日法要→中陰逮夜　参り→満中陰（忌明）法要→（百か日法要）→一周忌 →年回忌法要

※法名（納棺尊号）を遺体の胸元あたりに置く。

	衣　体	勤　行	
枕　経	布袍(黒衣)・輪袈裟(墨袈裟)	阿弥陀経・短念仏	勤行は仏壇の前
悔やみのお経	黒衣・墨袈裟	阿弥陀経・短念仏	(香料を持参)
納棺	黒衣・墨袈裟	東方偈・短念仏	
通夜	黒衣・五条(墨袈裟)	別掲 正信偈（阿弥陀経）	(香料を持参)
葬式	色衣・七条・切袴	別掲 正信偈	(香料を持参)
納骨・寺参り	黒衣・五条	阿弥陀経・短念仏	その都度焼香
永代経	黒衣(色衣)・五条	偈文(四十八願)	その都度焼香
初七日	黒衣・五条	観経(阿弥陀経)・掛和讃・ご文章・法話 又は和訳正信偈	その都度焼香
七七日逮夜	布袍（黒衣）・輪袈裟(墨袈裟)	阿弥陀経・掛和讃・(正信偈) ご文章	
（初月命日）	布袍（黒衣）・輪袈裟(墨袈裟)	阿弥陀経・掛和讃・(正信偈) ご文章	
満中陰(忌明け)	黒衣（色衣）・五条	伽陀・表白・経・掛和讃・ご文章・法話	
（百か日）	（黒衣・五条）	阿弥陀経・掛和讃・ご文章	
初盆法要	布袍(黒衣)・輪袈裟(墨袈裟)	阿弥陀経・短念仏	

● 通夜勤行

①導師入場　葬場に入るとき一礼する。葬儀檀まで進み、軽く一礼し、仏壇前に進み、焼香・着席。

②合掌…礼拝。

③正信偈（行偈又は草偈）（行讃又は草讃）・ご文章・法話

④合掌…礼拝。

⑤導師退出　起立し軽く一礼。葬儀檀まで進み、焼香。退出。葬場を出るとき一礼する。

● 出棺勤行

仏壇の前か葬儀壇前（荘厳檀、棺前）で葬場勤行に先立っての勤行。棺前勤行とは言わない。

①　（遺族・親族・来賓入場・着席）

②　導師・衆僧（法中）出仕・着席（座）　　葬場に入るとき一礼する。

③　仏壇にて焼香、合掌礼拝。（導師の動作に合わせて一同合掌礼拝）

④　「おかみそり」導師は葬儀檀前に進む。　南無帰依仏、南無帰依法、南無帰依僧まで言う。終わりに合掌礼拝。仏壇前に戻る。
　　＜生前中に「帰敬式（おかみそり）」を受け、法名を拝受している場合は除く＞

⑤　十四行偈　短念仏　回向　　（この後阿弥陀経はあげない）

⑥　導師・衆僧（法中）退出

葬場を出るとき一礼する。

● 葬場勤行

（①　路念仏）

②　出勤作相　衆僧（法中）出仕
　　葬場に入るとき、一礼する。

③　引き続いて導師入堂。導師に合わせて衆僧（法中）起立している。

④　砂張り（りん）二打

⑤　導師焼香　　導師に合わせて合掌・礼拝。

（⑥　表白）

（⑦　弔辞）（導師に合わせて衆僧（法中）着席）

（⑧　導師に合わせて衆僧（法中）着席）

⑨　砂張り（りん）二打

⑩　略伽陀(又は三奉請)

⑪　正信偈・念仏　　和讃は男女とも『本願力に…』でも良い。

衆僧（法中）焼香→喪主焼香→導師着席。導師に合わせて衆僧（法中）着席。引き続いて喪主→遺族→親族→来賓等焼香→参列者焼香

⑫　念仏・掛和讃・回向
⑬　弔電　＜司会者席にて行う＞
⑭　一同合掌　……＜導師の動作に合わせて＞……礼拝。
⑮　退出作相　　導師・衆僧（法中）退出
　葬場を出るとき、出入り口で一礼する。
⑯　喪主・葬儀委員長挨拶

■ 焼香について
　①　焼香台の１、２歩手前で一礼
　②　香炉の直前に進む。中啓を懐に入れる
　③　香を３回または１回つまみ、香炉に入れる
　④　合掌（念仏を称える）、礼拝。中啓を懐から取り出す。
　⑤　１，２歩下がって一礼
※葬儀中、諷経僧の焼香で導師の前に進んで行う場合、導師に軽く一礼して（導師は読経中ですので答礼はしない。）、仏前に進んで①～⑤の順で焼香をする。焼香後は自分の席に向かうとき、導師に深く一礼する。

●納骨について
葬式終了後(当日又は翌日)お手次の寺院に納骨する。また適当な時期に各家の墓地や本山に納骨する。特に何日までに納骨しなければいけないという決まりはない。
尚、誠照寺派の門徒は、遺骨の一部を宗祖親鸞聖人ゆかりの鯖江本山に納骨するよう(本山納骨)勧める。

●その他
ご法主の葬式出仕について
　焼香願いも葬式招待とみなす。随行は一人でも良い。なるべく正信偈の調声をしてもらう。僧綱板を付けてもらう。

第２回法式講習会

平成２２年８月２８日（土）午後４時より
場　所　対面所

内容
１．前回の復習　五条の着け方　衣のたたみ方　袴のたたみ方
２．念珠の扱い
３．中啓の扱い
４．焼香の仕方
５．門徒の諸仏事への対応
６．その他

◎ 装束衣体について

法衣を着用したときには、威儀を正しくし、行儀作法をまもること。また、法衣の取扱いは、つねに疎略にならならいようにする。

※記念色衣・制定色衣

一、紅鳶色　　（七〇〇回御遠忌記念）
二、蘇芳重色　　（秀政上人伝灯奉告記念）
三、濃栗皮茶色　（秀瑞上人伝灯奉告記念）
　　（宗祖七五〇回御遠忌記念）
四、紫玉虫緞子（本座一等）
五、従来から制定されているもの
　青丹色（本座一等）　白色

※記念五条・制定五条

六段紋を正規とする。
一、雪の下色白紋　　（七〇〇回御遠忌記念）
二、橙亀甲地色 白紋　　（生誕八〇〇年法要記念）
三、浅橙色 金白入交紋（秀政上人伝灯奉告記念）
四、退紅色　白紋　　（秀瑞上人伝灯奉告記念）
　　（宗祖七五〇回御遠忌記念）
五、濃蘇芳色 白紋（本座一等）
六、従来から制定されているもの
　住職衣体　白地金紋、紫地白紋又は金紋
　本座一等　白地赤寺紋

※記念袴・制定袴

一、紫緯白大紋切袴（七〇〇回御遠忌記念）

八藤紋は上座のみ

二、紫色二条八藤紋（秀政上人伝灯奉告記念）

三、従来から制定されているもの

紫色無紋切袴

★法衣（装束）着用について次のように定める。

一、第一種衣体

甲　色衣・七条・切袴

乙　色衣・七条

七条は納衣・総柄どちらでも良い。修多羅は白以外のものを使用する事。

二、第二種衣体

甲　色衣・五条・切袴

乙　色衣・五条

五条の小威儀の結び方は、蝶結びにする。

三、第三種衣体

甲　黒衣・五条・切袴

乙　黒衣・五条

丙　黒衣・墨袈裟

四、第四種衣体

甲　色衣・畳袈裟

乙　黒衣・畳袈裟

丙　黒衣・小五条

丁　略衣・畳袈裟・切袴（道中袴・俗袴）

◎ 念珠について

一、念珠は、双輪念珠と単輪念珠の二種がある。色衣・黒衣などを着用したときは双輪念珠を用いる。双輪念珠は、本装束用半装束用どちらでも良いが，七条着用時には、本装束用が望ましい。また五条着用時には、半装束用が望ましい。それ以外のときは単輪念珠を用いる。布教などの場合は紐房の双輪念珠（布教念珠）を用いて もよい。

二、念珠の持ち方

つねに親玉を上にして握り、房を左手に掛ける。（房は下に垂らさないようにする。）装束着用の際には、乳の下方、臍との中間ぐらいに、袈裟に添うて所持する。

なお経巻を拝読する際には、念珠は経卓に置く。この場合、二輪をそろえて、親玉を向うに、房を中央にならぶように整えて置く。

◎ 中啓について

一、中啓・雪洞・夏扇の類はいつも右手に持つ。

二、中啓は、金または金絵柄が表である。表を常に用いるまた絵柄があるなしは、どちらでも良い。

三、中啓は、衣と袈裟を着用したとき双輪念珠とともに用いる。また、法要以外の儀式で衣と輪袈裟を着用した場合は、中啓の代わりに夏扇を用いることもある。

四、持ち方は、いずれも起立または歩行の場合は右手で要部を持ち、表を外側に向け臍の右方程度の位置で、袈裟に添うてやや斜め下に向けて所持する。

正座の場合は、表を上に要部を右に向けて、ひざの前に横一 文字に置く。また、腰かけた場合は右手に保持したまま、両手をひざの上に置く。

起立または腰かけた姿勢で合掌したり、または華籠などを保持するために両手を用いる場合は、表を前にして白衣のえり元にさす。

〔注〕

① 念珠は、畳や床の上など歩行する場所にじかに置かない必ず適当な敷物の上に置くか、あるいは中啓・夏扇などを開いて、その上に置く。

② 念珠や中啓・夏扇を持ったまま、手洗いなどの場所に行かない。

③ 中啓や夏扇は開いて、あおがない。

④ 本山では、弔事用中啓は用いない。

⑤ 購入時についている紐はとっておく。

⑥ 右手を使用する場合は、中啓は白衣と襦袢の間に表側を向けて差し込む。

⑦ 桧扇は本山では法主のみ使用できる。ただし檀家の葬儀等には私用として用いて良い。

◎ 焼香の作法

焼香は、焼香台の一、二歩手前まで進み、一礼する。中啓を襟元に差し、少し前に出て、ゆっくりと三回焼香する。

焼香し終れば合掌礼拝し、少し下がり、中啓を右手に持ち、 一礼し、元の位置に戻る。

通常は焼香は三回であるが、場所、状況により一回でも良い。香を持って拝むことはしない。

★門徒の諸仏事にどのように対処するか。

各寺院に於いては、それぞれ先代からの習わしがあるので一応参考にして下さい。

	衣　体	勤　行	備　考
入仏法要 (新しく仏壇を入れる場合)	黒衣(色衣)・五条	伽陀・(表白)・経・掛和讃・法話・ご文章	経は嘆仏偈又は四十八願でも良い。
建碑法要 (新しくお墓を建てた場合)	黒衣(布袍)・墨袈裟	阿弥陀経(又は偈文)・掛和讃	和讃二首(どこでも良い)
起工式・上棟式・竣工式(建築)	黒衣(色衣)・五条	阿弥陀経(又は偈文)・掛和讃	和讃二首(どこでも良い)
お仏壇の移動、お墓の法名刻み等	布袍・輪袈裟	阿弥陀経(又は偈文)・短念仏	懐中名号持参
報恩講	黒衣(色衣)・五条	正信偈(草偈又は行偈・草讃)・ご文章・安心文	和讃(五十六億…でも良い)
月忌参り (逮夜参り)	布袍・輪袈裟(墨袈裟)	阿弥陀経・掛和讃(短念仏)・ご文章	和讃二首(どこでも良い)
祥月命日	黒衣・五条(墨袈裟)	経・掛和讃又は正信偈	和讃二首(どこでも良い)
年忌法要	黒衣(色衣)・五条	伽陀・表白・経・掛和讃・法話・ご文章	法話は必ずする事。朗読法話でも良い。
盆経	黒衣・五条(墨袈裟)	阿弥陀経・掛和讃又は正信偈(草偈・草讃)	
墓前お経	布袍・輪袈裟	阿弥陀経(又は偈文)・短念仏	